

1 カリキュラム・マネジメントとは何かを学ぶ

学校全体での「水平的学習」の 推進に向け、学校教育目標の構造化を

ワークショップの第1部ではまず、関西大学教育推進部の森朋子教授が、カリマネが求められる背景とその意義、カリマネを継続・充実させるポイントなど、「カリマネとは何か」について解説した。



関西大学教育推進部 教授
森 朋子
もり・ともこ

専門は、学習研究、学習理論。島根大学教育開発センター長等を経て、現職。共編著に『アクティブラーニング型授業としての反転授業』（ナカニシヤ出版）。

動画はこちら



人間の強みを生かせる指導を 組織的に推進する必要がある

カリマネを充実させていくためには、その目的をきちんと理解することが大切です（図1）。

現代社会は、AIを始めとする科学技術の発展に伴い、急速に変化しています。これからの数十年間には、既存の職業がなくなることも、新たな職業が生み出されることもあるでしょう。また、以前にはなかった問題の解決に迫られることも少なくないと思います。今後の社会を見ることが非常に難しい中、急激な変化に柔軟に対応していくためには、

社会に出た後も、必要な情報を自ら入手し、試行錯誤をしながら学び続ける資質・能力が欠かせません。例えば、仕事では、既定の業務だけではなく、新たな価値の創造を目指したり、家庭では、自分や家族のよりよい生活のために何ができるのかを考えたることが求められます。

では、そうした資質・能力を育成するために、学校には、どのような取り組みが求められるのでしょうか。それは、次の3つの学力をバランスよく高めることを目指した指導改善です（図2）。

- ① 見える学力（学んだ力）
- ② 見えにくい学力（学ぶ力）

③ 見えない学力（学ぼうとする力）

従来の指導では、①見える学力の育成に重点が置かれ、②見えにくい学力や③見えない学力は、行事等の

図1 カリキュラム・マネジメントとは

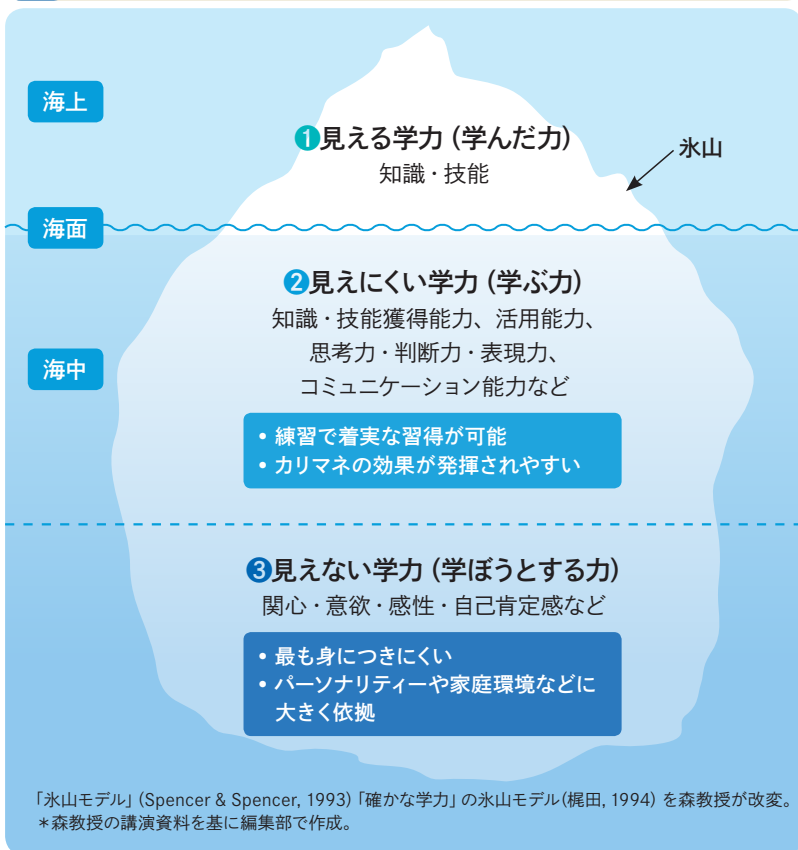
カリキュラムを主たる手段として、**学校の教育目標をよりよく達成していこうとする営み**。カリキュラムとは、教育計画だけを指すのではなく、毎年作成する教育課程、日々の授業、校内の組織、さらに生徒が学んだことを含めた概念。

*田村 2011, 2016 より。
*森教授の講演資料を基に編集部で作成。

*プロフィールは 2019年3月時点のものです。



図2 今後、組織的に育成していきたい学力(冰山モデル)

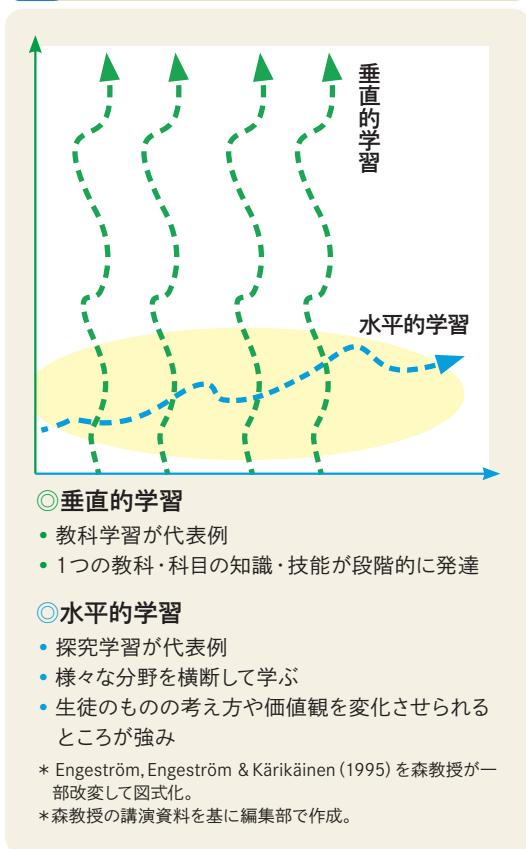


特別活動や部活動などを中心に育まれてきました。確かに①は重要ですが、進化を続けるAIが今後ますますその能力を高めていくことで、AIに代替されない人材を育成していくためにも、学校生活の中で最も長い時間を占める授業において②③の育成に力を入れ、問いかけを工夫したり、指導方法を改善したりすることが大切になります。②は、

自分の考えを発信したり、他者と協働したりするために必要ですし、③は、粘り強さや創意工夫の源泉となります。そうした学力を身につけられるところに人間の強みがあり、①をAI以上に活用することにつながるのです。

教師一人ひとりの指導の改善効果を高めるためには、全教師が目線合わせたカリキュラムの編成が欠かせ

図3 垂直的学習と水平的学習のイメージ



せません。例えば、②は、トレーニングの機会を増やすことによって着実な習得が可能です。高校3年間、中高一貫校であれば6年間、同じ目的の下に各教科・科目の授業でトレーニングを積み重ねれば、大きな成果につながります。カリマネは、そうした組織的な対応を図るために不可欠なものとなります。

カリマネは、単なるノウハウでは対応できません。また、カリマネを行う目的の理解が曖昧なままでは、それを充実させることは困難です。まずは、その必要性をしっかりと押さえることが重要です。

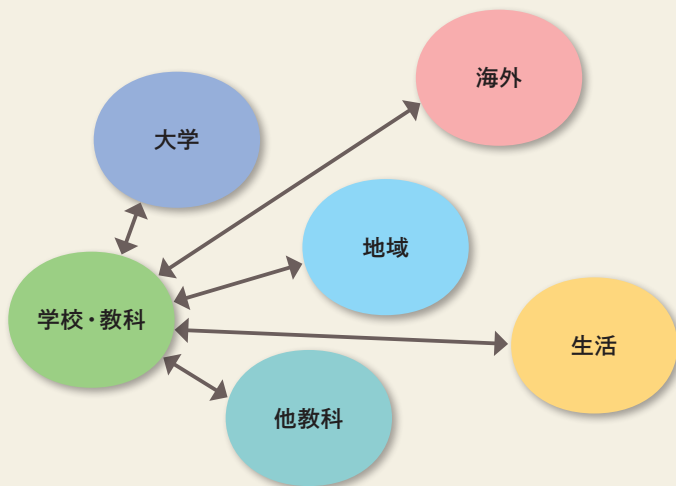
「水平的学習」で気づきを
得て、生徒は学びに向かう

学校での学びは、「垂直的学習」「水平的学習」(*)に分かれると考えられます(図3)。カリマネによって2つの学習を有機的に結びつけば、教育活動をさらに実りあるものにするのが可能です。

代表的な垂直的学習は、教科学習です。生徒は問題演習などに繰り返し取り組む中で次第に学習を深め、授業のめあてである活動を上手に、そして早くできるようにしていきます。ただし、1つの教科・科目の中だけで知識・技能が完結しやすい

* フィンランドのヘルシンキ大学で発達・学習心理学や認知科学などを研究している、ユーリア・エンゲストローム教授による分類。

図4 越境する学びのイメージ



*森教授の講演資料を基に編集部で作成。

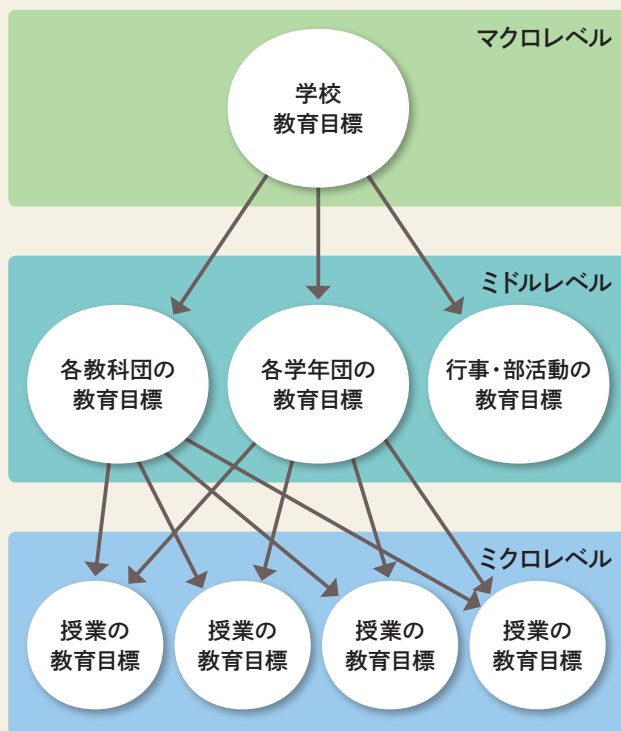
という課題があります。一方、水平的学習では、様々な教科・科目、さらには学校外へと越境していきます(図4)。そうした学習は、「教科・科目等の枠を超えた横断的・総合的な学習」として、次期学習指導要領でより重視されるようになります。また、部活動や体育祭などの学校行事も、このカテゴリーに入ります。

水平的学習には、生徒の視野や考え方を豊かにし、今まで気にとめて

いなかったことに意味を見いだすなど、価値観を変化させられるという特徴があります。代表的な水平的学習は、探究学習です。地域でフィールドワークを行ったり、大学の授業を体験したりする中で、生徒は自分が学んできた教科・科目の知識・技能が社会でどう生かされているのかに気づくでしょう。そうした気づきは、主体的に学びを深めることの原動力となって③見えない学力を高めるので、②見えにくい学力や①見える学力の向上にもつながります。

今後は、垂直的学習に加え、水平的学習の充実がますます求められます。そのため、カリマネを行う上では、両学習をどのように組み合わせるのかを検討することが大変重要です。組み合わせ方は多様であり、生徒や学校の実態によって異なります。例えば、幅広い学力層の生徒が集まる学校では、

図5 学校教育目標の達成のイメージ



*森教授の講演資料を基に編集部で作成。

まずは垂直的学習に力を入れ、徐々に水平的学習を増やしていくのも方法の一つです。学力の高い生徒から構成される学校ならば、早い段階から水平的学習を中心にカリキュラムを編成してもよいでしょう。

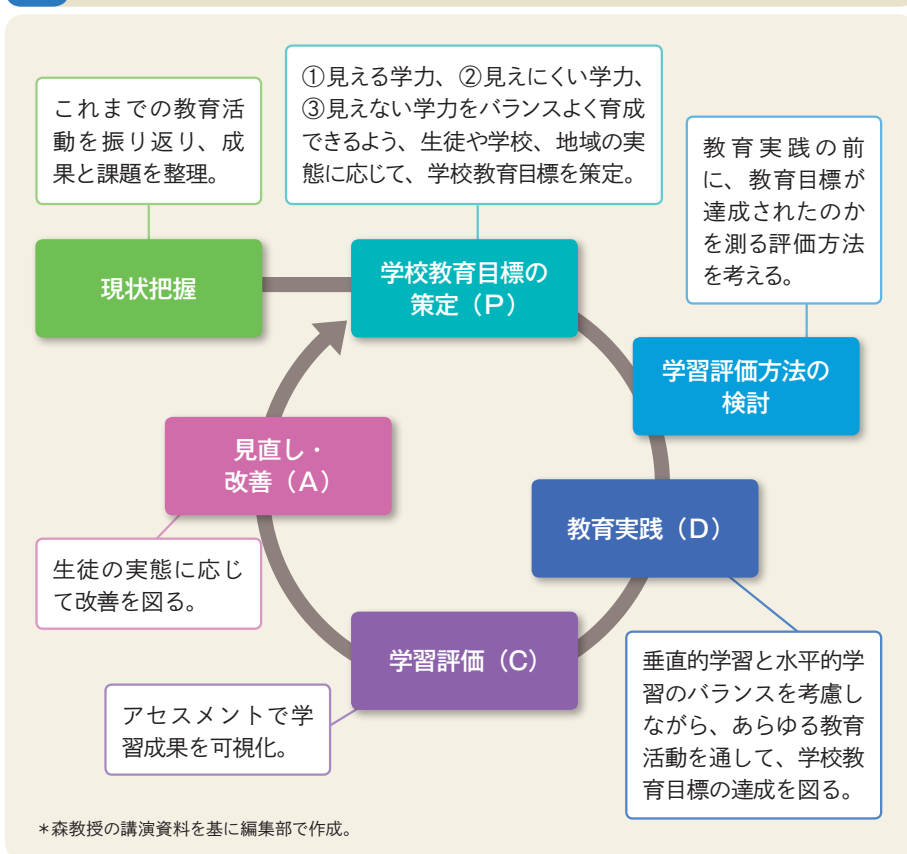
全学年・全教科の授業の教育目標に、学校教育目標を反映

先ほどお話しした通り、カリマネは学校が一丸となって取り組むものです。今回は、その最重要ポイント

を2つ紹介します。

1つめは、「学校教育目標の達成」をしっかり意識することです。私の専門分野である学習研究や学習理論では、学校の教育活動はマクロ・ミドル・ミクロの3レベルの目標によって規定されると考えられています。マクロレベルが学校教育目標、ミドルレベルが教科団や学年団などが掲げる教育目標、ミクロレベルが授業の教育目標です。先生方が生徒と日々向き合う中では、授業の教育目標の達成だけに注目しがちです

図6 教育のPDCAサイクル



が、カリマネを充実させるためには、学校教育目標の達成を常に意識することが欠かせません。

そこで、まずは学校教育目標に基づき、各教科団や各学年団の教育目標を設定することが重要になります。そして、各教科・科目の授業の教育目標には、教科団・学年団両方

の教育目標を反映させます(図5)。例えば、1年次の「化学基礎」であれば、理科の教科団と1学年団の全教師が集まり、学校教育目標について共通理解を図った上で、授業でどのような資質・能力の育成を目指すのかを検討する必要があります。

卒業までに授業で育成したい生徒の資質・能力とその評価観点をまとめた長期的ルーブリックや、あらゆる教育活動の目的や位置づけを整理したカリキュラムマップを作成することが有効です。それらによって、3年間・6年間の教育活動と学校教育目標との関連性を視覚的に把握できるようになり、学校教育目標の達成を意識した、授業の教育目標の設定に役立ちます。ただ、それらのツールの作成は手段に過ぎません。大切なのは、ツールを活用して議論し、学校教育目標の達成に向けて教師間の目線を合わせることです。そうした中で、教科団や学年団を超えた全校体制でのカリマネが実現します。

常に生徒の実態を見据え、教育のPDCAを回す

2つめは、「教育のPDCAサイクルの確立」です(図6)。

Pである学校教育目標の策定にあたっては、前提として教師による現状把握が欠かせません。自校の教育活動を振り返り、ねらい通りの成果が出ている活動と、思うような結果を伴っていない活動を整理し、それ

ぞれの結果の原因を検討します。そうして、生徒や学校、地域の実態への理解を深めた上で、①見える学力、②見えにくい学力、③見えない学力をバランスよく伸ばせるよう、学校教育目標を練り上げられます。

PとDの間に位置づけられるのが「学習評価方法の検討」です。「逆向き設計」(詳細はP.16参照)に基づき、教育実践の前に、どのようなツールを用いて教育目標が達成されたのかを評価する方法を決めます。

Cでは、課題を客観的に洗い出すため、アセスメントを用いた評価が大切になります。教育活動の成果の要因は様々です。同じ教育活動を複数の学年で行い、結果が異なることも珍しくありません。結果に一喜一憂するのではなく、全教師がエビデンスを基に生徒の実態を把握し、次のAに踏み出すことが大切です。

①見える学力に比べて、②見えにくい学力、③見えない学力の育成には時間がかかるので、3年間もしくは6年間のカリキュラムを通して計画的・組織的に行う必要があります。全校体制で教育のPDCAサイクルを回し、カリマネを継続・充実させていっていただきたいと思えます。